

版画家李平凡と日中版画交流

——戦後日本の左翼版画と関連して——

張 玉 玲

はじめに

版画家李平凡（1922年～）は、1943～1950年の7年間の日本滞在期間中に築き上げたネットワークを基に、日中版画交流に生涯を捧げた人物として知られている。彼は晩年、自らの活動を関連する資料と共に『版画交流風塵録』（李2001a）、『版画滄桑』（李編2001）などの書物にまとめた。これらの資料を通じて、彼の半生や日中版画交流の歴史的流れを知ることができる。

李平凡が推進してきた日中版画交流は、大まかに、1940年代から1950年までの、主に中国の木刻（木版画）を日本で広めていた時期と、1950年帰国後から文化大革命までの、日本の版画を精力的に中国で紹介していた時期、そして、1970年代後半から現在までの、日本と中国の関係団体により版画交流が再開され、双方向の交流を実現させた時期に分けることができる。この三つの時期は、日本と中国双方を舞台としていたが、それぞれどのような特徴があるのだろうか。上述の各時期の交流において、日本と中国の版画に接点があったのだろうか。また相手国の版画はどのように評価されていたのだろうか。また、李平凡と交流を続けてきた日本の版画家や関係者は、どのような人物だったのだろうか。これらの問題は、日本と中国の近代版画の発展、日中両国の社会状況、関連政策など、様々な要素に関わっているように思われる。しかし、これらの問題を解明することによって、李平凡が推進した日中版画交流の性質や、日中関係のもう一つの側面を伺うことができるのではないかと考えられる。本稿では、こうした李平凡の記録を主な手がかりに、日中両国の版画発展の歴史や当時の日中両国の社会情勢などを踏まえて、中国木刻と深く関わっていた日本の左翼版画家の版画運動と関連付けながら、上記の問題について分析してみる。

本文では、李平凡の活動舞台・背景の転換によって、李平凡の来日前、日本滞

在中、帰国後から文化大革命前、文化大革命後の四つの段階に分けて、議論を進めていく。

一、来日前の李平凡とその活動

1. 版画に目覚める

李平凡は1922年5月13日、天津のある大地主の家に双子として生まれた。原名は文琨である。李家は、地方の「郷紳」（土地の名士）であり、「五世同堂」（五世代が同居する）という典型的な封建地主の家庭であった。李平凡は小さいころ、農民を欺き、これに寄生して生活する自分の家庭に憤慨し、敵視していた。17歳の時（1939年）、自分の反抗意識を記した日記を盗み見した伯父は李平凡をしかり、彼を一族に叛く「不孝な子孫」と非難した。李平凡は毅然として家を出て、母校で働きながら天津美術館洋画科で勉強し始めた。このとき以来、「文琨」の名を捨て、自力で生活する平凡な人になろうと「平凡」と改名した。

1939年から1942年の間、李平凡は何人かの親しい友人と互いに当時の「禁書」を交換し、やがて秘密裏に「読書会」を組織した。当時から李平凡が愛読していたエドガー・スノウ（Snow, Edgar）による『中国の赤い星』¹⁾は、彼の共産主義や民衆革命に対する認識を深めたと思われる。こうした進歩的な書物や魯迅の作品を読み、「読書会」で互いの感想を話し合っているうちに、李平凡はますます権力と地位をかさに農民の労働成果を詐取する自分の地主としての家庭に嫌悪感を抱くようになった。このように、学生時代の経験や進歩的書物の影響で、李平凡は徐々に革命的思想を持つ青年に成長していった。

幼いころから絵が好きだった李平凡が版画と関わるようになったのは、従兄の李文珍とその同級生董化羽からの影響だという。李文珍らはかつて北京芸術専科學校に学んで、多くの木版画作品を創作した。1935年12月9日、冀（河北省の略称）東自治政府反対の学生運動「一二・九運動」でも活躍した当時のいわゆる「進歩青年」であった。まだ小学生だった李平凡は、彼らの木刻活動に強く引きつけられた。1937年に盧溝橋事変が起こり、日中戦争が全面的に勃発したことによって、李平凡は学校で勉強する機会を失った。そこで彼は、既に版画をやめた李文珍が残した板木と刀具で版画を独力で学び始めた。

1937年、李平凡の初めての木版画作品「苦力」^{クーリー}（資料1）が完成、翌1938年には、木版連環画「一個女人的死」（「ある女の死」）が完成した。また同年に、月

刊『社会生活』に処女作「考試」（「試験」）が掲載され、李平凡は版画家としてデビューした。また、1940年大阪『華文毎日』月刊に「晩婦」（資料2）と「小憩」が掲載されて以来、投稿生活が始まった。1942年のはじめての画集『平凡木刻版画 第一輯』（資料参照）が出版された。自画像「平凡在黑暗中」（「暗黒の中の平凡」、資料3）のカバーは、自分の眼を猫の目に似せて彫り、つとめて自分を、猫が暗黒の中でわれわれが生活している社会を観察しているかのようにしむけた。また、李平凡と他の青年版画家と協力し、1943年1月、天津市仏租界内のある講堂で（天）津（北）京木版画展を開いた。

2. 魯迅と木刻運動の影響

上述のように、若き時代の李平凡は、進歩青年である従兄などの影響を受け、木版画に目覚め、版画創作を通じて中国の暗黒な現実を暴露するとともに、版画展を通してそうした現実を民衆に伝えようと努めていた。しかし実際、李平凡を版画に導いた最も根本的な原因は、魯迅と彼が提唱した木刻運動にあると考えられる。

そもそも自国の民衆を思想から教化するために、日本で医学を勉強していた魯迅は、1909年に帰国し、文学に身を投じたが、まもなく美術が持つ民衆への広範な教育効果に期待した。1928年末から1929年にかけて、魯迅は朝花出版社を設立し、文学刊行物『朝花』と図録『芸苑朝華』を刊行し、東欧と北欧の文学を紹介する傍ら、外国の版画の輸入に励んだ。1929年1月から1930年5月にかけて刊行された『芸苑朝華』五冊²⁾のうち、三冊が版画集であり、美術愛好者の青年たちの版画に対する啓蒙が、この図録によって行われたと考えられる（神奈川県立近代美術館1983）。これらの刊行物を通して、魯迅は「革命の時には版画の用は最も広く、如何に忙しい時も、僅かな時間でできる」（魯迅1981：173）と、明確に木版画を革命の道具として提唱した。1931年8月、魯迅は内山嘉吉³⁾を講師に招き、前後20数人の青年を対象に木刻講習会を開いた。後に、魯迅の主導の下で各地の進歩青年たちが木版画の技法を習得し、頻繁な木版画展を開催するなど版画運動を勢いよく発展させていった（資料4）。当時の版画のモチーフにされたのが、ほとんど中国当時の腐敗した政治や一般庶民の貧困などの社会現象であった。中国新興木刻運動は最初から「民主運動」としての性質が強かったのである。

李平凡に影響を与えたとされる李文珍も董化羽も、こうした進歩青年の一員で

あった。董化羽は、1934年北京で設立された平津（北京、天津）木刻研究会の創設者の一人でもあった（世紀在線中国芸術網 HP）。そして、独学で版画を始めた李平凡が手本にしたのは、李文珍が北京から持って帰った魯迅序の『ある男の受難』（ベルギー マズレル作の木刻連環画、上海 良友図書公司、1933、九卷）と魯迅編序『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』（三閑書屋編印、文化生活出版社、1936、二卷）であり、産業革命によって失職したヨーロッパの労働者の厳しい現実を暴露したこうした作品の影響を受けて、李平凡は、貧困、失業などの社会問題を反映する作品を次から次へと作り出していったのである。

1936年10月19日、魯迅が逝去したが、その翌年勃発した日中戦争に伴い、木版画は更なる発展を見せた。1938年に『抗戦木刻選集』が出版され、6月には、木版画のはじめての全国統一組織「中華全国木刻界抗敵協会」（全木協）が武漢で成立した。同年、対日の長期持久戦に備えて民衆の間での宣伝活動を展開させるために、毛沢東や周恩来らは革命の根拠地延安で文学、音楽、美術、演劇の四つの部門を含む魯迅芸術文学院（魯芸）を設立するとともに、魯迅の下で成長した陳鉄耕、江豊、胡一川などの版画家らを講師に招集した。こうして、若い版画家は、延安を活動の根拠地にしながら民衆に対する宣伝活動の一環として重慶や桂林で毎年のように大規模な展覧会を開催した。また、全国で移動展を催し、抗日への民衆の意志の統一を図るとともに版画そのものの影響力を高めていった。版画の画風も、ドイツの表現主義とロシアの社会主義リアリズムの影響を同時に受けていた魯迅指導の時代と異なって、陝西地方の伝統的年画、剪紙などの民衆に受け入れやすい表現を取り入れていき、「民族化」していった。こうした木版画作品は、各種の出版物、新聞にも多数発表され、木版画集も刊行された（神奈川県立美術館1983）。

こうして、中国木刻が抗日戦争の武器として発展していく中、李平凡は版画家として成長し、そして来日したのだった。それ以降の数年間、彼は日本を舞台に版画活動を展開することになった。

二、第一期（1943～50年）：日本滞在中の版画活動

1. 来日と初期活動（1943～45年）

1943年、李平凡は版画活動の傍ら、河北省楽亭県の県立中学で美術講師をしていた。しかし活発な政治的活動が原因で学期末になって学校当局から辞任させ

られた。後に、同級生の友達の紹介を通して、神戸中華同文学校（当時の校長李萬之）による教師の募集に応じ、同年8月、李平凡は他の青年教師7名と満洲、朝鮮半島経由で神戸中華同文学校に赴任することになった。

来日後、李平凡は当時の李萬之校長の支持のもとで、神戸中華同文学校で美術講師をしながら、華僑の間で木版画を広めた。当時、日本の小中学校も版画の授業が設けられていたため、華僑学校でも版画の授業の増設が認められた（李2001b）。李平凡は、中学部と小学部の美術の授業で木版画を華僑子弟に伝授し、生徒が相互に刷り上りの良い木版画を贈り合うようにさせることによって、学生の版画に対する興味を引き起こした。さらに優秀な木版画は学校内に展示欄を開設して陳列・展示した。一方、生徒の間で木刻研究班も組織した。また、華僑学校の教師や成年華僑の中にも、木版画に興味を抱き始めたものが多くなった（資料5）。

後に、李平凡が発起人になり、木版画に興味を持つもの同士で「神戸華僑新集体版画協会」（以下「版協」と略す）を組織し、余暇に木刻を続け、華僑社会で版画運動を展開していった。その後、版協は画集『浮萍集』（浮萍＝浮き草）を出版し、華僑児童木刻展を行った。

しかし、『浮萍集』に掲載されていた飢餓に喘ぐ華僑児童をモチーフにした作品が「赤の宣伝をしている」とされ、兵庫県外事課の特高からの捜査を受けることになった。以来、李平凡の絵画活動は制限されただけでなく、外出のときも監視されるようになった。版画の授業は取りやめさせられ、版協も解散させられた。

こうして終戦まで、李平凡は版画歴史の研究と日本浮世絵の収集に没頭した。またこの間、藍蔚邦、招瑞娟、李平凡の合集『浮萍集』三輯の他、木刻研究班による作品集『学生木刻集』という手刷り本と、平凡の1943年5月から11月までの個人作品集『半年集』が出版された。

2. 戦後交流活動の展開（1947～50年）

終戦後、一度中止した華僑の版画活動が再開された。1945年9月15日に、李平凡は京都、名古屋、東京、横浜の華僑版画愛好者と連絡し、李平凡を代表責任者として解散させられた版協を「日本華僑新集体版画協会」（以下、「新版協」と略す）に拡大組織した。新版協は連絡、出版、展覧、資料研究の四つの部に分かれて、華僑社会で版画活動の普及や日中両国の版画界との連絡の保持、日中版画

友好交流の回復及び促進などを目標として掲げた。新版協のメンバーは報酬なく自発的に働いた。李平凡は、活動費を用意するために、中華同文学校のほかに、大阪国際新聞社の整理部長兼美術編集の仕事と、神戸外国語大学の講師を同時にしていた。そこで得た収入を新版協の基金として寄付した。後に華僑社会においても、新版協の「基金寄付援助運動」が展開され、版画交流への支援が始まった(資料6)。

新版協は、版画関連の書籍・新聞・雑誌を発行し、華僑だけでなく、日本社会に対しても自ら発信しようとした。その機関誌ともいえる『版画文化』(発行人曾広仁)は1946年9月1日に創刊された、中日両国語による最初の版画専門の新聞である。中国語版は李平凡が編集責任者となっており、李平凡が戦時中読書ノートから整理した「世界版画史」が連載された。日本語版は英文学者の佐々木敬が責任者となり、イギリスのC・サラマン著『新版画』(The New Wood-Cut)の訳文(佐々木敬訳)が連載された(資料7)。他にも、新版協は神戸華僑の支援の下で、生徒の版画作品集『華僑児童木刻手冊』を再版し、『簡易木刻手冊』および抗日戦争の勝利を祝う『給祖國的報告書』(『祖国への報告書』)も出版した。

1946年、李平凡は東京の内山書店を訪問し、中国青年版画家を指導した内山嘉吉から所蔵の中国初期の版画作品を借用し、日本での展覧会の準備に取り掛かった。1947年2月3日、戦後日本における初めての中国版画展「中国初期創作版画展」が神戸大丸百貨店で開催された。この展示会は2万人の観客をひきつけ、その後作品は大阪、京都、茨城などに巡回して展示されることになった。以来、新版協は、1947年2月から48年12月まで日本各地で13回の展示会を行い、中国木刻の影響を日本社会で広めていった。1948年夏、中国唯一の木版画全国的組織「中華全国木刻協会」は日本社会との交流を図るために、日本連絡処の設置を決定し、中華全国木刻協会日本連絡処は李平凡を代表に、尾崎清次を顧問に神戸で設立された。設立以来、日本連絡処はそれまで新版協の展示活動を補うと同時に、日本の版画家との交流に力を入れた。

李平凡をはじめとする華僑が、これほど活発に版画の活動を展開するには、いくつかの時代的要因と条件があった。まず、華僑の、戦時中あらゆる分野での活動・言論を弾圧された「敵国人」から「戦勝国民」となった解放感と喜びが彼らの版画活動を推進する大きな力となったことはいうまでもない。また、GHQの指令によって打ち出されていった日本の民主化政策の下で、戦時体制下あるいは

戦前から治安維持法体制下で閉塞を余儀なくされていた社会主義者・共産主義者の活動が公然と開始されたことがあげられる。1947年は、日本の左翼版画家が広範な活動を開始した年でもあり、それ以来の新版協の活動は、日本の左翼版画家や民主運動と切り離しては語れないものとなったのである。以下、李平凡と交流を続けてきた日本の左翼版画家と知識人の活動を見てみる。

3. 日本の左翼版画団体の活躍

中国の「木刻」と同じ性質の「左翼版画」は、日本においても1930年代前後に誕生した。その中心的存在となったのは、1932年に当時東京美術学校の学生武藤六郎や小野忠重（1909～1990年）をはじめとした22名の版画家によって結成された「新版画集団」である。その中で例えば小野忠重は作品内容の大衆化を意図して、労働争議、施療病院、工場区などをリアリズムとモダニズムの性格を併せ持った木版画に表して、資本主義社会の矛盾を鋭く突いた。結成後から1936年解散するまで、会員らは版画の複製性、普及性と民衆芸術的傾向を宣明し、街頭展を行い、簡易な小版画などを低価で配って、版画の大衆化に努めた（資料8）。

新版画集団と同時期に、鈴木賢二や新居広治、飯野農夫也のように、日本プロレタリア美術家同盟に所属し、プロレタリア美術展に出品したり、美術雑誌で前衛的な論文を発表していた左翼版画家も多くいた。戦時中、日本当局の弾圧によって活動を中止したが、終戦後、いち早く各地で版画運動を復活させた。彼らは、戦後の日中交流団体とともに、李平凡がリードする新版協と交流を深めていった。

中国木刻を積極的に日本で紹介したのは、菊池三郎や島田政雄らによって1946年に設立された「中日文化研究所」である。1947年から1950年の間に、中日文化研究所は新版協と相互協力しながら、日本各地で300回以上の中国木版画展を主催した。また、1947年10月、魯迅逝去11周年を記念し、「全日本新木刻運動会議」を茨城県で開催するなど、日本の人民版画運動の推進にも尽力した（資料9、10）。

新版画集団が解散したあと「造型版画協会」を新たに設立した（1937年）小野忠重は、1947年7月、他の左翼版画家や関連団体とともに李平凡をはじめとした新版協の代表を召集して、東京の美術出版社で「日中版画懇親会」を開いた。

また、鈴木賢二や新居広治、飯野農夫也、滝平二郎などは、「日本美術会北関東支部会」を結成し（1946年7月）、北関東を拠点に版画運動を展開したが、1949年さらに「日本版画運動協会」を設立し、メンバーが各自の故郷で版画団体を設立し運動を展開する以外、小野忠重や大田耕士（日本教育版画協会）、菊池三郎（中日文化研究所）などもメンバーとして迎え、版画運動を全国的なものへと展開していった（表1参照）。また、運動の一環として、李平凡や新版協を招いての版画家の交流会や中国木刻を紹介する展示会も頻繁に行われた（表2、3参照）。

1947年から1950年の間、中日双方の協力によって日本各地で行われた中国木版画の展示会は400回以上あって、『中国資料（中国木刻特集）』（中日文化研究所発行）、『朝日画報（中国木刻号）』など中国木刻を紹介する出版物も次から次と出版された。日中版画交流のピークを迎え、日本社会に「中国版画ブーム」が出現したと言われていた（資料11）。

以上の戦後における左翼版画団体の動きから、戦前から「芸術大衆化」を提唱してきたプロレタリア美術家らは、戦後再び民衆版画の普及を復活させ、民主運動を展開させる際、中国の木刻を大きく重要視したことがわかる。彼らは、日本の帝国主義に対抗するのに重要な宣伝媒体としての役割を果たした中国の木刻から大きな意味を見出した（1976年5月、日米版画研究会第一回研究会での発言による）、労働者の権益を保護・獲得するための版画創作活動を展開することにしたのである。たとえば、版画運動協会のメンバーは、労働、農民運動に積極的に参加し、ピラやポスターを多く作った。また、職場の美術サークルに版画を指導し、創り、サークルの流れ作業、分業の中で手摺りポスターを作った。こうして美術運動と労働運動を同時に進めていった左翼の版画家らは更に、中国の木版画の影響を民衆の間で拡大し、中国の芸術家との交流を深めていったのである。1949年5月1日メーデーのデモで中国の版画家麦稈の作品に「戦争反対」と書かれデモのポスターとして使われたことは、まさに、当時日本の版画運動と労働運動そして中国木刻の三者の関係を表した典型的な例であろう（資料12、13）。

1949年中華人民共和国の成立した後、李平凡は日本の版画家たちと中国で日本版画展を開催することを企画した。しかし、彼が帰国する前の1950年2月、国民党は、「台北中央社特電」というデマをでっち上げて、李平凡は、作家丁玲などとともに中国共産党によって日本に派遣されたスパイだと誹謗した（李1997：60）。李平凡は、華僑による新聞『国際新聞』で厳正な声明を発表した後、

1950年5月に帰国した。李平凡が帰国した後、新版協の顧問尾崎清次が引き続き中国木版画を日本で紹介し続けた。

三、第二期（1950～66年）：帰国から文化大革命までの交流活動

帰国した李平凡は、人民美術出版社の編集者となり、文化大革命が勃発する1966年まで、中国を拠点に日中間の版画交流を推進した。

1950年7月、李平凡は中国の版画家の協力を得て、新中国における最初の日本版画展『日本人民反帝闘争図片木刻展覽』を北京で行った。2週間の展示期間であったが、1万人以上の観客が訪れるという大反響であった。その後、上海、杭州、瀋陽、天津など、中国各地で日本版画の展示会が開催された。以降の10数年間、李平凡の努力によって、日本版画運動協会や日本版画協会のメンバーの作品、浮世絵などの展示会は頻繁に催されたのである。また、展示会と同時に、李平凡は中国各地で日本の版画発展の状況を報告会のかたちで紹介したり、版画講習会を開いて、日本の水印技法を広く普及させた（資料14～17）。

この時期、李平凡の編著になる日本の版画を紹介する画集『日本人民反帝闘争照片木刻集』（図録、1951年3月）、『日本人民版画集』（1951年6月）、『日本浮世絵木刻』（1961年）、『日本人民美術作品選集』（1961年）や、『解放区木刻』（1962年、皴雅との共著）、『新版画選』（1962年）や『魯迅収蔵中国現代木刻選集』なども出版された。

日本側とは、引き続き鈴木賢二や上野誠、内山嘉吉らとの連絡を保ちながら、日本での中国木刻展の開催に協力した。例えば、1950年～60年代にかけて尾崎清次が神戸、京都で主催した11回の展示会に、李平凡は作品の提供など、全面的に協力した。

こうして、李平凡の推進の下で、日本の人民版画が中国で広く紹介されていたが、中国の木刻は、中華人民共和国が成立した1949年からその発展がより一層国家の管轄・統制下におかれた。全国的版画団体は解散し、版画家は「中国美術家協会」に加入することになり、共産党の文芸指導方針の下で創作活動を展開することになった。工農兵（工場労働者、農民、軍人）に服務することは、美術創作の目標と方向であり、版画家が遵守できる唯一の創作方法は、社会主義リアリズムであった。1950～60年代の中国版画は画風と表現手法などにおいて単一化の傾向が強く、社会主義リアリズムの角度からしか評価できない（王2000）

ほど、芸術上の発展が少なかったのである。

1960年代にはいると、中国国内の厳しい自然災害や悪化する中ソ関係に影響され、中国版画と海外との交流は急激に減少した。1964年東京と北京で同時に行われた『日中版画交流展』を除けば、李平凡の所蔵品を用いての小規模な展示や日本版画研究会などの開催程度だった。

1965年、李平凡が編集中の『中国新興版画運動史料』（上、下）は審査され、日の目を見ることはなかった。1966年、文化大革命が勃発した後、李平凡は日本のスパイと誹謗され、湖北省咸寧の「五七幹校」に下放され、1972年に北京に戻るまで「改造」させられた。この間、李は美術日記の形で周りの風景を描く以外、日本の版画家との連絡はともかく、正常な美術活動さえ不可能となり、日中間の版画交流は空白の10年間にはいった。

四、第三期（1979年～）：文化大革命後の交流活動

1972年冬、李平凡は人民美術出版社に戻り、仕事に復帰し、そして翌年の1973年、日本語雑誌『人民中国』で「庶民版画家葛飾北斎」を発表した。この文章を通じて、日本の尾崎清次、内山嘉吉、上野誠、久保茂と日本の華僑は、李平凡が無事であることを知った。しかし、李平凡が日本の友人と連絡が取れるようになったのは、「四人組」が崩壊した1976年以降のことである（資料18）。

1979年2月、李平凡は妻周燕麗と日本を訪問した際、その四ヶ月の滞在期間中、日中版画交流を再開させるために奔走した。

この間、彼は、『日本と中国』（中日文化研究所発行）編集長の島田政雄の協力の下で、日中友好協会、日本版画協会、日本美術家連盟、日本教育版画協会および内山嘉吉、大田耕士、関野準一郎、上野誠、小野田耕三郎、平山郁夫、東山魁夷などを訪ねた。内山嘉吉が主催した歓迎会や日本美術家連盟による日中版画懇話会では、李平凡は、文化大革命で中国の美術家が迫害を受けた現実を紹介し、中断した交流関係を修復したいという中国側の要望を打ち出した。その結果、日中友好協会と日本版画協会の主催で、日本美術家連盟や朝日新聞社の後援によって中国現代版画展（1979年6月1～13日）が李平凡の帰国する前に東京で行われることになった。また、華僑と他の関係者の協力によって、神戸や大阪で李平凡の日本訪問を記念するための中国木版画展や李平凡の個展も開かれた。荒川義雄の協力のもとで、中日友好画廊が設立されることになり、それ以降の版画交流

を促進する拠点となった。

こうして、李平凡の努力と関係者の協力によって、日本社会の希薄化した中国版画への記憶を呼び戻し、中国と日本の版画界の交流が再び始まった。しかし一方、30年の間、日本の版画界は大きく変化し、文化大革命以前のような版画交流はもはや不可能であると、李平凡は気づいた。まず第一に、戦後李平凡と交流のあった左翼の版画団体のほとんどが有名無実のものとなっていた。次に、1960年代より欧米の数十回の国際版画展覧会において、多くの版画家が受賞し、日本は「版画大国」と称されるようになり、日本の版画は国際社会に向けて発信する立場に転じた。また、大田耕士による「日本教育版画協会」の指導の下で、全国の幼稚園、小中学校における版画教育が順調に展開されてきたことと、版画界の展覧、評価、出版と宣伝活動が活発であり、健全な版画マーケットが確立されていた。これらの変化は、文化大革命の破壊から蘇ろうとした中国版画界の現状と対照的であり、李平凡は大きな衝撃を受けた（李1997：147）。帰国後、李平凡は、日本訪問中に見た日本の版画界の新たな動きを中国の版画家に紹介し、中国版画の変革を呼びかけた（資料19）。

1982年、60歳を迎えた李平凡は人民出版社を定年退職することになったが、『版画世界』の編集長として人民美術出版社に再び招聘された。1983年から1992年までの10年間、季刊雑誌『版画世界』で、発展する中国の版画作品を紹介するだけでなく、中国で日本の版画展を、日本で中国の版画展を次から次と手がけていった。その中で、中国の黒龍江省出身の版画家の作品や、少数民族の版画、児童版画、農民版画、江蘇省の水印版画などを日本に紹介し、好評を得た。

表4からわかるように、1979年、日中間の版画交流が復活して、相互交流ができたのが、それまでの版画交流と区別される大きな特徴の一つである。また、文化大革命から目覚めた中国の芸術家らはより自由な題材と形式に基づく芸術性の高い作品を求めるようになったこと、中国の版画展を主催する日本側の団体が、日本版画協会や日中友好協会などであることから、文化大革命以降、日中間の版画交流は、それまでの「民主運動」や「人民芸術」などのキーワードから離脱した、「日中友好」の促進を前提とした芸術上の交流となったことが伺われる。

1992年12月、李平凡の定年退職に伴い、『版画世界』が終刊を告げた。1993年、日本文化芸術界と華僑たちは天津と協力し、平凡友好画院を設立し、李平凡の作品および彼が収集した多くの版画・資料などを展示・保存することになった。

五、李平凡と中国木刻そして日本

以上見てきたように、李平凡は、版画を通じた日本との交流の中でその一生を過ごしてきたのである。彼は、近代における日中版画交流史を書き上げた一人と言っても過言ではない。では、李が推進してきた日中版画交流の三つの時期はそれぞれどういった特徴があったのか、日中両国の各時期の情勢を踏まえながら、あらためて見てみよう。

1. 戦後日本にとっての中国木刻

前述したとおりに、中国の木版画は、社会革命意識の民衆への浸透と日本への抗戦意欲の高揚を目的として誕生し、発展していった。民衆に対する宣伝の需要から、当時の木版画は、版画家によってデッサンが造られ、木に彫られると、機械刷またはインキのローラ刷によって大量印刷されていた。版画家によって入念に彫られたものの、「画、刻、摺」のいずれも重視する近代版画の視点から見れば決して成熟したものではなく、芸術性は低いものだった。これは、中国木版画の指導者魯迅が「芸術性」よりは、まず民衆に着目した木刻の思想力・宣伝力を重視したことと、版画家を目指そうとした青年たちが置かれていた当時の苛酷な社会的・経済的条件に原因がある。そのため、中国の木刻は何より民主運動、抗日運動における民衆への宣伝道具としての性質が強まっていったのである。そして、中国「木刻」の大量印刷によって革命の意識を簡単にかつ迅速に民衆に浸透させようとしたこの特徴こそ、「民衆美術」に視線を向けた日本の左翼版画家の共鳴を呼び、戦後李平凡の活動を媒介に盛り上げられていった日中間の版画交流の接点となったと考えられる。

日本では、前述したように、戦後、GHQは一旦労働組合を再建させたが、共産主義勢力の拡大を恐れて1947年に制圧しようとしていた。一方、米ソ両大陣営による冷戦の拡大、朝鮮戦争の勃発などを背景に、各地で民主運動が展開されるなか、日本の左翼版画団体も1947年以降活発に活動を行い始めた。こうして、貧困、失業などに苦しんでいる民衆の姿を描くことによって、支配階級による高圧的政策や日本「帝国主義者」による戦争を真正面から批判する中国木刻は、必然的に日本戦後民主運動にかかわるようになったのである。また、日中戦争で中国人民の勝利、またその後の徐々に可能性が大きくなっていった労働者の利益を代表するとされる共産党政権の成立は、日本の左翼美術家や労働者たちに大きな

刺激を与えたと考えられる。これは、戦後しばらくの間、日本における中国木刻の宣伝を主な内容とした日中版画交流が日本全国で展開されていった主な原因であろう。言い換えれば、日本の左翼版画家らは木刻が持つ強いメディア性を生かし、戦後の民主運動を展開させていったということである。

2. 新中国にとっての日本の版画

1950年、李平凡が帰国した後、新しい社会主義国家の中国で紹介し、普及させていったのは、いわゆる「人民版画」と呼ばれる左翼版画家の作品と江戸時代の浮世絵であった。帰国直後の数年間は、各地で行われた日本の版画展で展示されたほとんどの作品は、鈴木賢二、上野誠、飯野農夫也、滝平二郎、北岡文雄などの左翼版画家の作品である。これは、李平凡が在日していた間の版画交流の延長線にあるものと考えてもよいが、当時の中国の政治的・社会的状況からの必要でもあると思われる。

まず当時の中国では、芸術家たちの創作活動を左右する不動の指針が存在していた。それは、1942年毛沢東が魯芸で発表した「延安の文芸座談会における講話」である。「我々の文学・芸術は、いずれも人民大衆のものである」。「何よりもまず、労働者・農民・兵士のために創作され、労働者・農民・兵士によって利用されるものである」。「人民が一心同体となって敵と戦うのを助けるため、人民を結集し、人民を教育し、敵に打撃を与え、敵を消滅する武器として、文学芸術を適切に革命という機械全体の中の一構成部分たらしめるのである。」(毛1966年)とあるように、芸術の内容と形式、発展と普及など、そのいずれも「労働者、農民、兵士」を基本理念としなければならなかったのである。この講話はその後、国家の政策として全ての文学・芸術者の指導方針となった。建国した1949年以降も、前述したとおりに、この講話の内容は中国芸術家が遵守すべき唯一の方針であり、彼らが参考にできる外国の版画といえば、ソ連と東欧の社会主義国家のものだけであった。

その一方、日本の侵略を退けて、国民党の勢力を中国本土から追いだす際に主役として貢献した「人民」の立場に立ち、「帝国主義反対」もスローガンとして掲げていた。

新中国のこうした背景から、李平凡が文化大革命まで手がけていた版画展で主役となったのは、日本の左翼版画家による、農民、労働者を主題とした作品がほとんどであった。李平凡が日本に滞在していた間に収集した1700点の浮世絵の

一部が初めて中国で展示されたのは、1957年、中国美術家協会による展示会においてであった。

3. 中国と日本社会状況の変化と木刻の衰退

1979年李平凡が日本を再び訪問し、日中間の版画交流を無事に再開させることができたが、文化大革命の空白の10年間、また1950年以降の日本経済の発展などによって、日中両国の版画交流の性質が大きく変わったのである。

まず、朝鮮戦争を経て、講和条約の締結を終わり、国連への参加が許された日本は、その間大幅な経済復興を成し遂げて、戦前以上の工業水準に突っ込むようになった。版画を含む日本の美術界も、直接、間接的に戦後日本の経済復興の路線に関わりあった。新聞社とデパートの企画によって、西洋美術、日本美術、東洋美術、現代美術などの名で美術展が頻繁にかつ華やかに開催されるようになり、日本の美術は戦前と比較にならないほど活発な国際交流の中で、国際美術界における地位を着実に築き上げていった。1979年李平凡が日本を訪問したとき目にしたのは、まさに、こういった状況だった。その一方、豊かになった日本社会と世界に開かれた美術界を反面から象徴するように、日本の左翼版画家たちは、1964年北京、東京での同時展を行ったのをピークに、思想、創作、生活などの問題が積み重なって、運動の勢いが衰えていった。1979年、李平凡が文化大革命以前のように版画交流を再開させようとしたとき直面した問題も、左翼版画家らが、病気や生活の貧困でほとんど活動を中止した状態に陥っていたことだった。そもそも、中国と日本の民衆が置かれていた状況が大きく異なり、中国の民主運動で大きな役割を果たした木刻運動は、果たして日本の民主運動にも通用したのかと、左翼版画家ら自身が自省していたのであった（栃木県立美術館2000）。

それに対して、新中国が成立してから文化大革命終結までの30年間、李平凡による日本の左翼版画家と、ソ連やポーランドなどの社会主義国家との数少ない交流以外、国際社会との接触が皆無に近く、芸術上の発展はだいぶ遅れを取っていた。また、1979年改革開放政策が実施されてから、中国の経済も徐々に発展の軌道に乗り、美術市場も自由な取引ができるようになると、欧米収集家の趣味に合わせるような西洋美術や水墨画などは、経済的利益に直接、かつ迅速に結びつくため、多くの若手画家を惹き付けた。それに対して、大量複製ができるということで、「独占」の満足感を抱くことができない版画は収集家の注目を引くこ

とがなく、その上、余分な時間と体力を費やすため、今版画を創作する画家はほとんどいなくなったのが現状である。

こうして、木刻を中国の民主革命で重要な役割を果たさせてきたその「複製性」は、皮肉にも、凄まじい発展を遂げようとする中国美術の領域から木刻が消えてしまう一つの原因にもなっているのである。

おわりに

以上、李平凡の中国木刻と日本の版画界にかかわってきた一生を、来日前、日本滞在中、帰国後から文化大革命まで、1979年以降から現在までの四つの時期に分けて振り返った上で、日中版画交流の三つの時期の特徴を分析してきた。抗日運動、国民党との内戦など特殊な国内外環境の中で、大衆を教化しながら彼らを革命参与に動員する媒体としての役割を果たした木刻は、戦後、自ら民主、平和、人権を求めようとする日本民衆にも一時的に受け入れられた。また、社会主義国家として成立した新中国では、日本の左翼版画が頻繁に紹介され、人々の関心を集めた。1979年以降版画交流が再開し、「日中友好」ムードの下で芸術交流として一時期盛況を見せていたが、中国版画家の減少と李平凡の引退に伴い、近年衰えつつあるのが実状である。日中版画交流の歴史を通してみれば、芸術性よりは版画の「民主運動の道具」という媒介性の方が、李平凡が推進した日中版画交流の出発点であり、その後の版画交流の運命を方向付けたものではないかと思われる。李平凡と彼が関わってきた日中版画交流は、近代日本と中国の関係を別の角度からみなおすことができるものであり、同時に、日中両国の芸術交流の歴史に新たな一頁を書き下ろしたものと考えてよいだろう。

近年、日中両国ともに蔵書票の収集家が増加し、蔵書票への関心が高まっていることは、中国の版画にとって大きな救いであろう。今後、中国社会全体の芸術への関心が高まり、関連の文化政策が制定されていくなかで、中国の民主革命の時期において大きな役割を果たしてきた版画が再び注目を浴びる日が来るかもしれない。中国の文化芸術界が、中国版画の芸術性と思想性を今一度、今日における中国の経済・文化事情と照らし合わせ、中国版画の特有な芸術的・社会的価値を生かしながら更なる発展の道を探ることこそ、李平凡が推進してきた版画交流史から得る示唆であり、今後の重要課題ではないだろうか。

注

- 1) *Red Star over China*, 1938. 宇佐美誠次郎訳。中国語訳名『西行漫記』である。なお、この本は彼が渡日した際も所持され、戦後中華同文学校では国語の教科書としてしばらく使われ(李2001: 79)、当時同文学校で学ぶ華僑青年の意識形成に大きな影響を与えたと思われる。
- 2) 『芸苑朝華』は、12輯に分けて何期かにわたって刊行する予定だったが、途中から、出版資金が不足し、朝花社が倒産したため、残りの7輯は出版できなかった。刊行予定のものも含め、『芸苑朝華』では、ロシアを中心にフランス、イギリスの(版)画家や画集が紹介された。
- 3) 内山嘉吉は当時成城学園小学部の美術講師で、1931年魯迅が上海で主催した木刻講習会の技法講師として中国の第1代の新興木刻家を育成した。兄の完造は魯迅と親交があり、当時上海内山書店の店主をしながら魯迅の木版画運動の展開に大きな力を与えた(内山1981)。

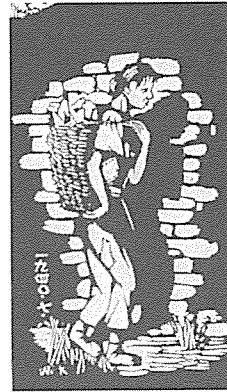
参考文献

- 李平凡 1947 『中国初期木刻集』日本華僑新集体版画協会
李平凡 1983-1984 (訳: 小野田耕三郎) 『風塵録——日中版画交流史』『記録』57-64号
李平凡 1997 『版画滄桑: 李平凡版画60周年回憶録』北京出版社
李平凡 1999 「百年校慶有感——記念校工翁阿来先生」神戸中華同文学校『建校100周年記念』
pp. 130-131
李平凡 2001a 『版画交流風塵録』中国香港東方芸術中心
李平凡 2001b 「萬之先生永遠活在我們心中」李萬之先生記念集編輯委員会『緬懷李萬之先生』
pp. 76-77
李平凡編 2001 『版画滄桑』中国香港東方芸術中心
李平凡・周燕麗編 2001 『葳書票夜話』中国香港東方芸術中心
日本人民反帝闘争図片木刻展覧会展出委員会編 1951 『日本人民版画集』上海新晨光出版
居文鐘ほか編 2001 『画家李平凡』中国香港東方芸術中心
居文鐘 孫雁編 1992 『画家李平凡』雲南美術出版社
内山嘉吉 1981 『魯迅と木刻』研文出版
雛雅・李平凡編 (1962年) 小野田耕三郎訳 1972 『中国解放区木刻』未来社
栃木県立美術館 2000 『北関東の戦後版画運動展』図録
恩地孝四郎 1953 『日本の現代版画』創元社
青木茂 2001 『世界版画史』美術出版社
岡本祐美・西山純子ほか 2004 『近代日本版画の見かた』東京美術
祖父江昭二 (編) 日本社会主義文化運動資料 7 復刻版 1979 『プロレタリア文化』『コップ』
別巻 戦旗復刻版刊行会
戦旗復刻版刊行会 (編) 日本社会主義文化運動資料 9 復刻版 1980 『プロレタリア芸術』・
『前衛』別巻 戦旗復刻版刊行会
栗原幸夫 1990 『芸術の革命と革命の芸術』社会評論社

河北倫明 1969 『近代日本美術の研究』社会思想社
熊野直樹ほか編 2004 『社会主義の世紀——「解放」の夢にツカれた人たち』法律文化社
マイケル・サリバン（新藤武弘訳）1973 『中国美術史』新潮社
牧陽一 2007 『中国現代アート——自由を希求する表現』講談社
牧陽一ほか編 2000 『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店
魯迅先生記念委員会編 1995 『魯迅全集』新疆人民出版社
毛沢東 1966 『毛沢東選集』人民出版社
福田新生 1956 『解説 日本美術史』洋々社
王琦 2000 「回顧と前瞻（回顧と展望）」世紀在線中国芸術網 HP 掲載論文
<http://www2.big.or.jp/~adel/sobi/sinhanga-text.html> 2007年6月20日最終参照。
世紀在線中国芸術網 HP：
<http://cn.cl2000.com/exhi/banhua20th/nianbiao02.shtml> 2007年6月20日最終参照。
日本美術会 HP：
<http://www.nihonbijyutukai.com/nichibi/menu3.htm> 2007年3月20日最終参照。



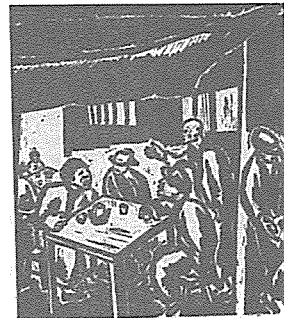
資料1 李平凡初めての木版画作品「苦力 (労働者)」1937年 (李2001a 所収)



資料2 木版画作品『晩婦』(45.7×23.5cm) 1940年 李平凡作 (李1997所収)



資料3 『平凡木刻版画 第一輯』(1942年印刷、200部) (李1997所収)



資料4 丁玲著『法網』挿絵1 (11.5×13.5cm) 1933年 (李1947所収)

作者は、1931年木刻講習会を受講した青年版画家陳鉄耕 (1908~1970年) である。



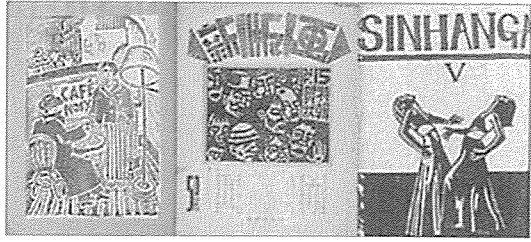
資料5 李平凡来日後木版画作品「大工山本敬一」(34.5×26cm) 1943年 (李1997所収)



資料6 1946年9月、神戸中華同文学学校児童木刻小組メンバーと李平凡 (李1997所収)



資料7 『版画文化』第一期 中国語版 (李1997所収)



資料8 新版画集団の月刊版画誌『新版画』 小野忠重版画館所蔵



資料9 1947年2月、中日文化研究所が東京にて「中国木刻展覧会」を主催した際の案内 (李1997所収)



資料10 1947年10月18～19日、茨城県大子町で行われた「全日本新木刻運動会」開幕式
写真提供：鈴木賢二研究会



資料11 戦後の日本において「中国木刻ブーム」が現れた。
写真は、東京で発行されていた中国木刻を紹介する雑誌の一部である。(李1997所収)

全中国の人民解放闘争
美術家同志諸君

親愛なる中国の美術家諸君
中国共産党を先頭とする革命的勢力の三十年亘る英雄的闘争の三十
五年の革命の斗争は、今日中国の人民を解放し、
この革命の波は、日本に押し寄せ、日本に押し寄せ、日本に押し寄せ、
一九四九年七月三日、東京に於て日本共産党
全国党員美術家会議を開催し、美術戦線の革命的
発展のために熱烈な討論を行つて、
中国木刻協会日本連絡所李平凡同志のメッセ
ージに於て、日本共産党美術家同志一〇〇名の
今日こそ全日本を代表して集つた黨員美術
家は中国美術家諸同志の革命的行動を通じて
生み出した「木版画」に對して大きな感銘を
与えられたのみならず、同志諸君のこの成果
こそ偉大な同志毛沢東の旗の下に結集し、民
族の独立と自由と平和のために闘ひ抜き、人
民に服務する革命的精神から生まれたもので
あることを学んでおります。日本における革
命的の昂揚は、国鉄十二万労働者の首切りを
端緒に、画期的発展をしようとしております。
日本の全労働者、人民大衆は中国人民の勝
利に勇気付けられ、又学び反動政府のファ
ッショの暴力に對抗し、日本共産党を中核に
する汎汎な民族戦線を結集——
人民の完全な解放のために立ちあがるでせう。
われわれ美術家の戦線に於ても中国美術家
同志の成果に勇気付けられ統一戦線のために
努力しております。われわれ美術家同志一同
はさらに更に強力に中国との文化の交流を
のぞんでやまず、より偉大な人民の芸術を
達成するために日本の独立と自由と平和の
ために、諸君に負けない努力と成果を誓ひ、
同志としての力一ぱいの握手を送ります。
中国の人民解放万歳、中国の革命的芸術発展万歳
一九四九年七月四日 日本共産党美術家一同

中国の人民解放万歳
中国の革命的芸術発展万歳
一九四九年七月四日
日本共産党美術家一同

資料12 1949年7月、日本共産党美術家が中国の版画家に宛てた手紙 (李2001a 所収)

「親愛なる中国の美術家諸君：中国共産党を先頭とする革命的勢力の三十年亘る英雄的闘争は、今日中国人民を解放し、この革命の波は非常に勢いで日本にも押し寄せわれわれを奮立たせています。一九四九年七月三、四日両日、東京に於て日本共産党全国党員美術家会議を開催し美術戦線の革命的発展のために熱烈な討論を行つております。中国木刻協会日本連絡所李平凡同志からのメッセージは日本共産党美術家同志一〇〇名の風のような感動の拍手で迎えられました。

今日こそ全日本を代表して集つた黨員美術家は中国美術家諸同志の革命的行動を通じて生み出した「木版画」に對して大きな感銘を与えられたのみならず、同志諸君のこの成果こそ偉大な同志毛沢東の旗の下に結集し、民族の独立と自由と平和のために闘ひ抜き、人民に服務する革命的精神から生まれたものであることを学んでおります。日本における革命的の昂揚は、国鉄十二万労働者の首切りを端緒に画期的発展をしようとしております。日本の全労働者、人民大衆は中国人民の勝利に勇気付けられ、又学び反動政府のファッショの暴力に對抗し、日本共産党を中核にする汎汎な民族戦線を結集——

人民の完全な解放のために立ちあがるでせう。われわれ美術家の戦線に於ても中国美術家同志の闘争の成果に勇気付けられ統一戦線のために努力しております。われわれ美術家同志一同はさらに更に強力に中国との文化の交流をのぞんでやまず、より偉大な人民の芸術を達成するために日本の独立と自由と平和のために、諸君に負けない努力と成果を誓ひ、同志としての力一ぱいの握手を送ります。中国の人民解放万歳、中国の革命的芸術発展万歳 一九四九年七月四日 日本共産党美術家一同」



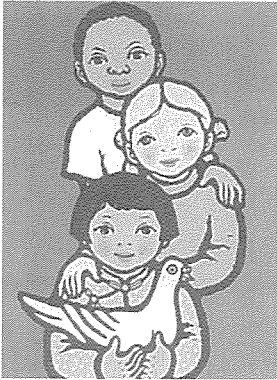
資料13 1949年日本の労働者によるメーデーモ、中国版画家麥得の作品「釈放された父」に「戦争反対」と書かれ、ポスターとして使われていた。(李1997所収)



資料14 1950年7月、北京中山公園で「日本人民反帝闘争図片木刻展覧会」が行われた。(李1997所収)

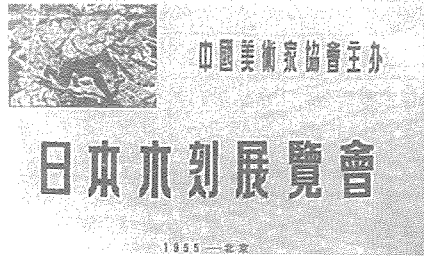


資料15 1950年、「日本人民反帝闘争図片木刻展覧会」にて展示された新居広治作品「高萩炭鉱事件その一」(13×10cm) 1950年(1951年出版された『日本人民版画集』所収)

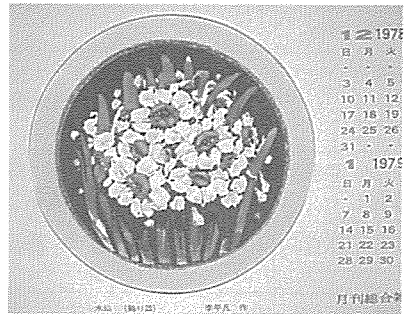


資料17 李平凡作品「我們要和平(平和がほしい)」水印木版61.5×49.2cm 1959年「ライプチヒ国際書籍版画展」で銀賞を受賞。(李1997所収)

資料19 1982年、中日友好美術画廊によって「中国木刻版画展」が帯広で開催。写真は展覧会の宣伝車(李1997所収)



資料16 1955～56年、中国美術家協會は北京、重慶、瀋陽、上海で「日本木刻展覧会」を主催。(李2001a所収)



資料18 1978～1979年の二年間、『人民中国』の表紙絵に李平凡の独創「皿絵(画盤)」掲載。



表1 戦後日本で活躍していた左翼版画団体

団体名	成立年代	代表人物	主な活動	機関誌
日本美術会	1946年4月	鈴木賢二、新居広治、上野誠、滝平二郎、飯野農夫也など	アンデパンダン展を毎年主催。1950年、中国木版画を24点特陳。	美術運動
日本美術会 北関東支部会	1946年7月	鈴木賢二、新居広治、上野誠、滝平二郎、飯野農夫也など	水戸国鉄機関区や日立各工場、高萩各炭鉱の職場サークルを指導し、茨城県職場美術協議会の結成を支援。1947年5月、中日文化研究所による「中日版画展」真岡に誘致した。	
全日本職場美術協議会	1947年3月	鈴木賢二	労働者の版画創作の指導	職場美術
刻画会	1947年6月	鈴木賢二、太田耕士、新居広治、飯野農夫也、李平凡など	民衆木版画運動の提唱	刻画
日本版画運動協会	1949年	滝平二郎、上野誠、三井寿雄、中山正	アメリカの侵略戦争に反対し、民族独立を追及する。	版画運動
はるかぜくらぶ	1950年	鈴木賢二、新居広治、滝平二郎		赤山椒
刻画晴耕会	1950年	滝平二郎		刻画晴耕
日本教育版画協会	1951年	太田耕士	児童の版画教育を提唱、推進。	HANGA
日本造型版画協会	1937年3月	小野忠重	新版画集団から転じたもので、版画の独自な性格を追求。	
中日文化研究所		菊池三郎	日中間の文学・芸術の交流を推進。	中国資料

表2 戦後日本で開かれた中国木版画展、交流活動

展示会 活動名称	期間	場所	主催者	内容 (参加団体)	反響
中国初期 創作版画展	1947年2月 3日～8日	神戸大丸 百貨店	日本華僑新集 体版画協会、 版画家川西英 の協力	内山嘉吉所蔵 の中国初期木 版画作品68点	観客2万人。美術雑誌 や新聞、週刊誌など中 国の木版画を取り上げ た。その後、大阪、京 都、東京などの百貨店 で巡回展示となった。
日中版画展	1947年2月 19日～25日	東京銀座 の三越画 廊	中日文化研究 所主催、朝日 新聞社後援	中国と日本の 版画作品	観客1万人余。その後 日本各地で巡回展示と なった。
日中版画 懇談会	1947年7月 16日	東京美術 出版社	日本造型美術 協会	李平凡報告 「中国木刻の 性格と発展」	日本版画協会、日本美 術会、中日文化研究 所、職場美術協会、内 山書店、一水会、中国 留日同学総会、日本華 僑新集体版画協会
全日本新木 刻運動会議	1947年10月 18日～19日	茨城県大 子町	中日文化研究 所	魯迅を記念す ること、日本 民衆版画運動 の研究と展開	造型版画協会、刻画 会、日本美術会、職場 美術協会、奥久慈版画 回、内山書店、大子町 教育委員会、日本華僑 新集体版画協会
中国抗戦 八年木刻展	1947年11月	神戸経済 大学	日本華僑新集 体版画協会、 神戸経済大学 中国文学研究 会(代表：大 久保茂)	中国版画集 『抗戦八年木 刻集』『北方 木刻』の作品 を拡大写真に し、展示する	展覧会閉幕前、軍隊か ら退役し再び入学した 若者の座談会を開き、 日中戦争について討論
中華全国木 刻協会日本 連絡処成立	1948年夏	神戸	李平凡が責任 者、周燕麗が 秘書、尾崎清 次は顧問、尾 崎文恵が顧問 秘書。	日中版画交流 の促進と日本 で中国木刻を 紹介すること	日本各地の労働組合と 学校に連絡を取り、中 国木版画作品の巡回展 示を計画。全日本中国 木刻移動展の準備、推 進
新版画 夏季講習会	1948年8月 23日～28日	東京今川 女子高等 学校	日本新版画懇 話会主催、日 本教職員組合 文化部後援	版画の民衆化 と版画技法の 普及	李平凡も、日本新版画 懇話会の幹事の一人で ある。

中日現代版画交歓展覧会	1949年2月8日～13日	神戸そごう百貨店	日本新版画懇話会主催、日本版画協会、中日文化研究所、中華全国木刻協会日本連絡処等の協力	日中両国の代表的版画作品が展示	「中、日、朝国際版画講習会」と講演会が行われた。
全日本中国木刻移動展	1949年3月	日本全国	中華全国木刻協会日本連絡処	厳選された50点の中国の木版画作品の複製品と100点以上の原作を各地で展示。	全国の学校、労働組合による複製品の展示は82回で、大きな都市で行われた原作の展示は23回、合計105回だった。

表3 文化大革命まで李平凡によって主催された日本版画の展示会・講習会

年代	展示名	場所	作品（内容）	備考
1950年7月2週間	日本人民反帝闘争図片木刻展覧	北京中山公園		大反響のため天津、瀋陽、杭州、上海にも巡回展示
1951年1月1週間	日本版画展	杭州市中央美術学院華東分院	日本版画作品100点、作者20人	報告会「日本木刻と中日交流」
1953年5月2週間	日本人民芸術家木刻展覧会	北京北海公園	日本版画作品97点、作者26人	
1953年10月10日間	日本版画史観摩会	北京中央美術学院礼堂	日本版画作品400点	報告会「日本版画と中日版画交流」
1955年7月2週間	日本木刻展覧会	北京中国美術協会展示ホール	日本の創作版画と人民版画作品計153点、222幅。	上海、西安、重慶、漢口、広州へ移動展
1957年8月10日間	日本浮世絵版画展	北京中国美術協会展示ホール	作品114幅	上海、重慶、天津へ移動展
1957年～1965年	日本版画史観摩会、日本浮世絵木刻観摩会、日本創作版画観摩会、日本人民版画観摩会	北京、上海、重慶、成都、杭州、武漢、貴陽、広州、福州、漳州、泉州、南京、蘇州、長沙、昆明、瀋江		日本版画の報告会、日本水印木版画技法講習会

表4 文化大革命後の展示会、交流活動

展示名	年代	場所	主催者	内容	反響（結果）	備考
日本美術家連盟懇話会	1979年5月	東京美術家会館	日本美術家連盟	李平凡は、中国美術界と美術家の現状を紹介し、中国の版画新作のスライドショーを放映し、「中国現代版画展」を開催するための賛助を得る。	日中版画交流を再開させるための第一歩として、中国現代版画展の開催が決定。	
中国現代版画展	1979年6月1～13日	東京	日本版画協会、日中友好協会主催、日本美術家連盟、朝日新聞社後援	文化大革命後初めての中国版画展として、中国木版画作品を多数展示	日中版画交流が再開。	日本版画協会が主催した唯一の一國版画展。
中国現代画家作品展	1980年5月20～	東京銀座中央美術館	日中友好協会、中日友好画廊主催、中国中日大使館後援	人民美術出版社の著名な画家、版画家、書道家の作品	文化大革命後中国美術の明快、多様な画風を日本に紹介することができた。	『中華人民共和国美術出版社画家作品集』が編集された。
日本版画協会 第48回全国展	1980年	東京	日本版画協会	中国版画特別展示室を設け、40点の作品を展示。年会に李平凡を招待した。		神戸華僑招瑞網は日本版画協会の会員。
日本著名版画家作品展	1980年7月	中国青島	人民美術出版社と青島市工人文化宮	鈴木賢二などの人民版画以外、高木志郎、関野準一郎などの新作	中国各地の新聞で取り上げられ、展示に対する評論が掲載された。	後に『日本現代版画展』として四川成都、重慶、山東済南、広西南寧などで展示。
魯迅誕生百年、中国木刻版画五十年—中国木刻版画大展	1981年7月5日から3週間	神戸鱗の家	中日友好画廊主催、神戸新聞社後援	中国の木版画作品		同年、東京、横浜、栃木においても同じく魯迅生誕100年を記念する中国木版画展が開かれた。
現代中国版画展	1982年～1983年	神戸市教育会館	『版画世界』編集部と日中芸術交流センター	現代中国の版画作品、黒龍江省居住の版画家の新作	神戸市だけでなく、周辺の大阪、岡山などからの観客も多く、好評を得た。	後に福山、広島などで巡回して展示された。
日本現代版画展	1985年3月	雲南	『版画世界』編集部と雲南画院、雲南美術協会	日本現代版画作品		
中国農民版画展	1986年5月25～31日	東京	『版画世界』編集部	四川省出身の版画家の作品		